

国語科と英語科の教科間連携が生徒に与える効果 —山形県内の公立中学校における実践を事例として—

三浦登志一

大学院教育実践研究科

澁江 学美

最上広域市町村圏事務組合教育研究センター

矢口 美喜

新庄市立新庄中学校

小野奈津美

新庄市立新庄中学校

大山 真典

新庄市立新庄中学校

佐藤 詩穂

新庄市立新庄中学校

(令和4年9月8日受理)

要 旨

本研究は、国語科と英語科が連携した学習指導を行うことが、中学生にどのような効果を与えるのかということについて、中学校における授業実践に基づいて検討するものである。Y県内A中学校の第1学年及び第2学年の生徒113名を対象として、国語科と英語科の教員4名が、同一教材を学習の対象として3つの単元の授業を実施した。授業の展開過程や生徒の感想についての分析から次の点が明らかとなった。第一に、教科間連携による学習に対する生徒の評価が高いことが分かった。学習の振り返りを、「面白い」という言葉を使って行っている生徒が多く見られた。第二に、国語科と英語科それぞれの学習に対する見方に肯定的な変化が生じることである。第三に、言葉に対する生徒の意識を高めていることが明らかになった。

キーワード：教科間連携・国語科教育・英語科教育・中学生

1 研究の背景

中央教育審議会の教育課程部会に設置された「言語能力の向上に関する特別チーム」は、2016年に審議の取りまとめを行っている。その中で、言語能力を向上させる際に「特に言葉を直接の学習対象とする「国語科」及び「外国語活動・外国語科」の果たすべき役割は極めて大きい」ことを指摘している¹⁾。『中学校学習指導要領(平成29年告示)』においては、「求

められる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習を充実すること」が求められるとし、学習の効果の最大化を図る1つの視点としてカリキュラム・マネジメントの推進を示している²⁾。そこでは、学習の基盤となる資質・能力として、「言語能力」が例示されている。カリキュラム・マネジメントの考え方がもたらした効果の1つに、教科間の連携を推進しようとする意識の高まりと考え方の変化が挙げられる。異なる教科が連携する学習をそれぞれの単純な足し算として捉える考え方から、共通性のあるような部分を組み合わせながら相乗効果を挙げようとする考え方への変化を促している。国語科と英語科は共に言語能力を育成する教科であることから、両教科が連携して授業を展開することは、求められる資質・能力の育成につなげることができると考えられている。

国語科の指導においては、「国語科と同様、言語を直接の学習対象とする外国語科との連携」が特に重要であるとして、「国語科の学習内容が外国語科等の学習に結び付くよう指導の時期を工夫すること」や「関連のある学習内容や言語活動を取り上げた単元の設定を工夫すること」などが例として挙げられている³⁾。英語科の指導にあたっては、言語的感性を養うことを助け、英語使用に際しての気付きを促す上で、「英語と日本語の言語的類似性や相違性に目を向けて、両言語を対比する」ことが有効であるとし、英語の学習と日本語の学習を連携させ、「相乗効果を生み出し、言語能力の効果的な育成につなげていくこと」が重要であることされている⁴⁾。英語の学習を行う際には、推測したり、想像したりする力も必要である。日本語を通して得た様々な知識や情報が背景となり、英語で聞いたり読んだりする際に、それらが英語の単語や文章に関わる知識とかみ合せて内容理解につながる場合がある。こうした国語と英語が補完し合う関係を、学習場面に取り入れていくことが、生徒の学習を充実させると考えられる。

文部科学省の直山木綿子教科調査官（当時）は、「外国語教育単体で考えるのではなく、母語と合わせて、言語教育としてとらえる必要がある」と述べ、母語の教育と外国語教育を「言語教育」として理解していくことを推奨している。同時に、「今は全く別のものとしてとらえている傾向がある」ことを指摘している⁵⁾。この直山の指摘が、現在の国語科と英語科の教科間連携の状況を的確に表している。相乗効果があると想定されてはいるものの実態としてはなかなか動かないのが、国語科と英語科の連携であると理解することができる。そうした状況を一歩進めるために、どのような実践を行うことができるのかを模索していく必要がある。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的と方法

本研究は、国語科と英語科が連携した学習指導を行うことが、中学生にどのような効果を与えるのかということについて、中学校における複数の授業実践に基づいて明らかにすることを目的とする。

研究の方法として、国語科と英語科で学習内容に共通性をもたせた授業を実施し、生徒の学習の状況に関する分析を行った。教員（国語科2名、英語科2名）によって、生徒が授業場面でとった特徴的な行動、授業後の生徒の感想の分類などの整理を行っている。授業実践はY県A中学校の中学1年生45名（2クラス）と中学2年生68名（3クラス）の計

113名を対象として、2022年5月から7月にかけて実施している。

(2) A中学校における教科間連携の状況

A中学校では、2020年度以降、教科間連携やカリキュラム・マネジメントをテーマとして学校研究に取り組んできている。理科や社会科の教科間連携は、SDGsなどを教材として用いる場合にイメージが描きやすいものであり、連携する形でのいくつかの実践が行われた。

その一方で、国語科と英語科の教科間連携は具体化されない状況が続いていた。英語科では、English Camp等の様々な実践が行われてきており、イメージングやクリル等の勉強をしようという土壤が教科担当の教員たちに見られていた。さらに、2022年2月には第3学年の生徒が「英語による文化発表会」を行い、英語劇のシナリオを朗読劇に仕上げる実践を展開している。朗読劇は、英語と日本語の両方を使って行われている。このような経緯が、国語科と英語科が連携して授業を実践する土台となっている。

3 先行研究の検討

国語科と英語科が連携する目的について、柗木（2017）は「言語能力向上」と「意識変化」を位置付けることを提唱している。「言語能力向上」は両科の連携を前提としなくとも通常の授業で達成可能である一方で、「意識変化」は教科間連携が行われる中でこそ達成できるものであると指摘している。この「意識変化」は、生徒の意識変化と教員の意識変化の2つの側面があり、特に生徒の意識変化に注目している⁶⁾。

柗木（2016）は、戦後から1960年代までを対象とした国語教育と英語教育の連携についての特徴を整理している。「(1)国語教育と外国語教育を合わせて「言語教育」と捉える動きがあったこと、(2)その「言語教育」という概念のもとで、国語教育と英語教育の共通点が模索されたこと、(3)しかし一方で、主に文学教材を通じた人間形成を重視する国語教育と、コミュニケーション能力の育成を目指す英語教育とでは、全く異なったことをやっているという意識が存在したこと」の3点である。(3)にある学習観・指導観の違いが、「連携」という発想が広く共有されなかった一因と考えられる」と指摘している⁷⁾。国語教育における文学への偏重は、1999年の学習指導要領以降、その改善が求められることになる。そのような改善が進められてはいるものの、教科間連携に関する実践的な展開は不十分な状況が続いている。

英語科と国語科の連携については、メタ言語能力の育成に注目した研究として、言語横断的に働くメタ文法能力の育成を目指した実践が行われている。その結果、メタ文法能力を育成するためには、言葉の仕組みに気付かせる活動を意図的に仕組む必要があるとされている。秋田ほか（2013）は、「母語を起点としながら、新たな外国語習得によって個々の言語の規則を超えたところにある大きな言語の法則を理解する」ものとして「メタ文法能力」をとらえ、メタ文法能力を育成することが、日本語や英語などそれぞれの言語の運用能力の育成につながると想定している。中等教育学校第5学年の生徒を対象とした授業展開過程の分析から「生徒にとって、文に焦点を当てた教材によって日本語と英語の文章表現における修飾関係の差異や、英語と漢文との否定構造の対応の差異を通して、文法を暗

記ではなく文の構造と意味、言語体系の特徴を結びつけて解釈する経験ができ、文法学習に対する気付きをもたらしたことが示された」と考察している⁸⁾。

斎藤(2019)は、英語を英語で教える学習が推奨される状況に懐疑的な立場を採り、日本の高等学校や中学校では、「生徒のもっとも精緻な思考を可能にしている日本語を足場として英語を学習させるほうが効果的である場合が多い」という判断を示している⁹⁾。王(2020)は、「ことばの教育」の観点から、「国語と複数の外国語の連携によりことばへの気づきを育てること」の重要性を指摘している¹⁰⁾。「ことばへの気づき」は、メタ言語能力を具体化した概念として大津由紀雄らによって提起されたものである。松本(2020)は、言語を思考と表現の基盤としてとらえ、「思考の方法とその表現技術の両方をリンクさせながら指導していくこと」の必要性について言及している。日本語と英語両言語での言語技術の学習がどのような影響を及ぼすかについて、日本人大学生を対象として、言語技術に関するスキルを日本語と英語の両方で指導する調査を行っている。その結果、日本語使用の場合は4つの言語技術のうち2スキル(対話技術①、説明・描写の技術)、英語の場合は3スキル(対話技術①、説明・描写の技術、依頼・断りの技術)について事前・事後テスト間に有意差が見られたとし、「両言語による言語技術指導(学習)の効果がある程度認められた」としている¹¹⁾。

榎木(2019)によると、これまで「連携」の実践を行った学校は、中学校1校、高等学校9校、中等教育学校1校の11校である¹²⁾。2000年代に入って徐々にではあるが、高等学校を中心にして取り組みが行われるようになってきている。国語科と英語科による連携の授業実践を、中学校段階にも広げていく必要がある。

4 授業実践の実際

(1) 授業実践 A

- ① 単元名 谷川俊太郎「朝のリレー」の朗読会を通して
授業者：矢口美喜教諭(国語科)、佐藤詩穂教諭(英語科)
- ② 対象生徒と実施時期 第1学年45名(2クラス) 2022年6月～7月
- ③ 授業構想及び留意点

国語科では「言葉に出会うために」という単元で、相手意識を持った表現について学ぶ。声を「出す」のではなく「届ける」ために何が必要なかを、実際に聞き合いながら取り組んだ。声量や速度、アクセントやイントネーションなどの学習を終え、まとめとして、他者に伝えることを意識した詩の朗読会を計画していた。「朝のリレー」の詩を、「読む」で終わらずに「届ける」要素を取り入れるため、自作の一文と英語を朗読に取り入れることにした。取り組みに難しさがあることで、生徒同士が伝え方について積極的に話し合うようになり、相手を意識した表現についての関心が高まるのではないかと、指導者のねらいがあった。また、自作の一文を訳する時に、適切な日本語に置き換える必要が出てくる。その際、新しい言葉に触れる良い機会となるとも考えた。

英語科では教科書以外にもたくさんの英文に触れさせたいという実践目標があり、洋書の絵本を教材にして、英語に親しみながら語型の習得や語彙量を増やしたり、英訳詩の朗読を通してリンキングの向上を目指したりする取り組みが計画されていた。入学して

間もない1年生は語彙量、知識ともに少なく、「朝のリレー」の英訳詩と自作の一文を作る際に必要な「While～」の英作文はかなりハードルの高いものになることが予想された。しかし、ALT、国語科と連携を図りながら、自作の文が英語になって相手に届く喜びと、日本語と合わせて英語表現に触れることで、仲間と楽しみながら表現を味わえるのではないかと考えた。

国語科と英語科の連携のポイントとして、同一教材「朝のリレー」を両科で扱う学習に取り組んだ。国語科で「朝のリレー」を学習し、自作の一文を考える。その間、英語の授業で英訳の「朝のリレー」を読み、自作の一文ができると英訳して、日本語、英語どちらでも読めるようにして、朗読の下地を作った。朗読会の準備段階では、国語科と英語科の合同授業を連続で設定し、生徒の取り組みの様子を両教科で共有できるようにした。また、国語科と英語科・ALTでデモンストレーションを行い、朗読会のイメージを持たせた。できるだけ多くの朗読や工夫を見せるために3～4人の小グループ班編成をし、①日本語・英語のバランスを考えた効果的な表現を目指すこと、②自作の一文（人数分）を必ず入れること、③聞き手を考えた伝え方（声量、速さ、正しいアクセントやイントネーションなど）を意識することの3つの確認事項を伝えた上で、各グループで話し合っ朗読の形を決定した。

この実践をした学年では、進んで表現しようと工夫できる生徒がいるものの、全体的には自身を表現することに苦手意識を持つ生徒が多い。また、コロナ禍で小学校高学年時に大勢の前で発表することに制限があったこともあり、相手を意識した表現に関して従来の小学生と比較すると、大きな場での発表経験が少なかったと思われる。自信を持つことで想像力を広げ、中学1年生としての新しいものに触れる好奇心を刺激することで、国語と英語、さらには活動から広がる他教科への関心を高めることにつながればと考えた。

④ 単元計画（両教科で進度と取り組みの情報交換をしながら取り組んだ。）

	国 語	英 語
1	<p>○「朝のリレー」を日本語で朗読し、世界観をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広い世界でリレーするように朝がつながっていくイメージを捉える。 ・地球のどこで誰がどんなことを思って夜を過ごし、朝を迎えているのかを自由に想像させる。 <p>【評価の観点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進んで音読し、自分のイメージや考えを文章に表したり、グループ内で発表したりすることができたか。 	<p>○英訳「朝のリレー」を読み、英文に親しむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めて耳にする英単語の発音について教科担任やALT、タブレットの機能を活用しながら、個人やグループで音読練習をする。 <p>【評価の観点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発音やアクセント、抑揚を意識して、音読することができたか。
2	<p>○「○○が～のとき△△は…している」の構図で自作の一文（ワンフレーズ）を作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タブレットを活用し、朝のリレーをする国を決め、写真や国の様子が分かる記述などを参考にしたり、自分の想像力を広げたりしながら、自作の一文の内容を決める。 	<p>○国語で作った自作の一文を英語に翻訳する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「While～」で始まる英文の作り方を学ぶ。 ・辞書やタブレットを活用したり、ALTのネイティブな発音に英語のリズムを感じたりしながら、自作の英文を読み深め、グループ（3～4人構成）やクラス間で交流する。

	国 語	英 語
	<ul style="list-style-type: none"> ・国については自由に決めてよいこととするが、生徒の関心や実態に合わせて、イメージしやすく思いを込めやすい日本を入れる事も勧める。 ・出来上がった表現をグループ内や他グループと交流させ、詩に生まれる言葉のリズムや表現の仕方をさらに考えさせる。 <p>【評価の観点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主体的にツールを活用し、詩の世界観を壊さずに国々の人の暮らしや人物の思いを想像し、自作の一文を考えて表現することができたか。 ・グループでの交流を通して、より良い表現について考え、話を聞いたり助言をしたりすることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で考えた表現が英語になって伝わる楽しさを味わわせることで、英語表現へのより高い関心を持たせる。 <p>【評価の観点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の作った「朝のリレー」を、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができたか。 ・抑揚や区切りを意識し、内容が表現されるように音読することができたか。
3 4	<p>○日本語と英語を取り入れた「朝のリレー」を班ごとに再構成し、朗読会の準備をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表はコロナ感染予防対策の一環で、クラス内で行うこととする。 ・「学校以外で発表するとしたら」という想定で、日本語と英語での表現の他に、耳だけでなく目でも楽しめるようにパワーポイントを使って表現することにも挑戦させる。 ・詩の日本語や英語での表現、また自作の一文の表現については、生徒の実態に合わせて柔軟に対応する。 <p>【評価の観点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で分担を考え、意欲的に朗読したり、協力して自分たちの朗読を成功させるための準備をしたりすることができる。 ・聞く相手を意識した朗読の仕方（読む速さや正しいアクセントやイントネーション、適切な文法や英語の発音）を工夫し、自分たちの目指す表現に合わせた適切な方法を選択して発表することができる。 	
5	<p>○朗読会本番（録画で記録する）と振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの発表（準備から発表まで）を振り返り、振り返りシートに感想などを含めて記入させる。 <p>【評価の観点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りシートの各項目に対し、自分の意志で解答を決定し、また、自分の思いを書くことができたか。 	

⑤ 生徒の学習状況

地球上のどこの誰と誰をつなぐか、そこで生きている人たちは何を考え何を見ているのか、「自作の一文を考えることで詩の世界を味わわせ、楽しませたい」という思いが指導者にはあった。生徒は、「夜」と「朝」の2つの時間帯について自作の一文を書く活動を行った。授業場面では単純な活動にとどまることなく、生徒それぞれのこだわりが見られた。

「朝」と「夜」の内容をリンクさせたり、言葉をかけ合わせたりと、表現にこだわりを見せる生徒がいた。テレビで毎日のように報道される戦争の終息を願う生徒、夜と朝のひとつを切り取って書く生徒、勝利の喜びと新しい命の産声をかけ合わせて書く生徒など、詩

の世界観を壊さないよう言葉の量や内容に配慮していた。最終的に、全生徒が自作の一文を書くという学習課題を完了させることができた。

以下は、生徒の作成したものの一部とそれに対応する英訳である。

日本語	英訳（英語科・ALTで指導）
日本の少年が幸せそうに毛布にくるまって寝ているとき、トンガの少女は世界平和を願う。	While a young man in Japan sleeps happily in his blanket, a young girl in Tonga wishes for the world peace.
アイルランドの少年がきれいな夜空を見上げているとき、日本の主婦は一息つきあたたかいお茶を飲んでいる。	While a young boy in Ireland looks up at the beautiful night sky, a housewife in Japan takes a break and drinks green tea.
インドのお母さんが娘と一緒に布団に包まれながら眠りにつくとき、日本の甥っ子はカーテンを開け一発大きなあくびをする。	While a daughter and a mother in India sleep in their futon together, a nephew in Japan opens the curtain and lets out a big yawn.
パリの若者がライトアップされた夜景を撮影しているとき、日本のおばあちゃんは光を浴びてラジオ体操をする。	While a young man in Paris takes a picture of the illuminated night view, a grandmother in Japan does radio exercise while enjoying the sun light.
マドリードのサッカーファンが優勝の喜びを爆発させ歓声を上げているとき、日本の赤ちゃんが朝日をバックに産声を上げている。	While a Madrid soccer fan lets out a joyful victory cheer, a Japanese baby cries for the first time under the morning sun.

中学1年生にとっては難易度の高い英単語を使って英文を作っている。学習課題の難しさよりも、自分の作った日本語の文が違う言語になって伝わる楽しさが勝ったのか、充実感・達成感を感じているように見える生徒が多かった。

一人一人が違う内容だったので、練習は主に個人練習とし、タブレットのイマーシブリーダー機能を使って行った。何度も練習していく中で、一人読みからグループで聞き合ってさらに精度を上げようと努める姿や、発音やアクセントにまで注意を向ける姿もみられた。さらにアイコンタクトをとりながらスムーズな発表を目指す姿も確認できた。GIGAスクールの導入以来、アンケートのやりとりや授業の振り返り、課題追究やレポートなど積極的に活用を試みている。本授業では、写真や文章、音楽を取り入れた、視覚で捉えられる発表手段としてパワーポイントを勧め、それぞれの工夫から効果を得ることができた。以下は、そのパワーポイントの活用例である。

【活用方法1】 訳を視覚で捉えさせる効果

- ・自作の一文（日本語・英語）を読む際に、文のまとまりに合わせ、画像と文とを左右に分けて表示していた。英文をまだ十分に理解できない生徒には、まとまりを作って見ることが内容理解に大変有効だった。
- ・日本語と英訳を表示して活用していた。自分たちが成功でき、かつ聞き手にとって聞きやすい朗読の在り方を班で練り合い決定していた。その結果、聞きやすさの他に、他言語で聞くとどのような表現になるのかを対比させることができていた。

【活用方法2】共有イメージの補助的効果

- ・語彙量の差や個人の発達に関わる理由などから、耳からの情報だけでは内容を捉えきれない生徒が少なからずいる。ある班は、画像を朗読に合わせて切り替えながら聞き手とイメージを共有できるようにしていた。朗読中、聞き手から声があがる場面が見られ、手応えを感じている様子がかがえた。「詩のイメージがわいた。」「画像を見ていると自作の一文を旅しているようだった。」などの感想を聞くことができた。

⑥ 生徒の感想

国語科と英語科の両方の学習が終了した時点で生徒が書いた感想として、以下のようなものが見られた。

- ・活動に対する感想

何回も練習してタイミングがぴったり合ったり、全部通すことができたりしたとき、とても達成感があり、楽しかったし、コラボしたら苦手な英語でも面白いなと思いました。

その国のだれが何をしているかを想像しながらフレーズをつくるのが面白かったです。

「～が～しているとき」、「～は～をしている」という文を作る時、国の特色などを知れてとてもおもしろかったです。

- ・言葉への気付きに触れた感想

日本語と英語では言語がちがうのに、同じあたかさを感じることができました。あまりなじみのない英語でも、しっかり練習して、よくできたと思います。

いつもは、別々に勉強している国語と英語をまぜてやるのは、とても楽しかったし、おもしろかったです。日本語と英語をまぜることによっていつもとは、ちがう会話になったし、新しい英語なども知ることができました。

時差によって国のやることが変わって色々な文を考えられて楽しかったです。「少年」「若者」「おじいちゃん」などといった人物のはばも広くして面白かったです。

「経度」を英語で表すと「longitude」となる。いままで聞いたことない単語がたくさん出てきて、他の言葉を英語で表すと、どうなるのかとても知りたくなった。

- ・新たな関心の広がり

他の班の国の紹介や発表があつて、面白いな、もっと知りたいなと思った国があつたので機会があればくわしく調べてみたいなと思いました。

よりイメージが付きやすい表現は何かと、いろいろと試行錯誤すること。

英語だけではなく、中国語やイタリア語など、ちがう言語だとどうなるのか。

実践の最後にアンケートを実施した。学習後の生徒の「国語」と「英語」に対する関心度の変化について、7段階（1～5の5段階に、「それ以下」-「1」よりも低い評価-と「それ以上」-「5」よりも高い評価-を加えた）で自己評価させた。国語は、7段階中「4」が48.7%、「5」が24.4%であり、「それ以上」と評価した生徒が9.8%だった。英語は、7段

階中「4」が48.7%、「5」が26.8%であり、「それ以上」と評価した生徒が9.8%だった。また、朗読会を終えての自分の達成度を5段階で自己評価させた。平均は3.7であった。分からない単語や表現の仕方、グループで1つのものを発信する難しさがあったものの、それができた時の喜びの大きさが表れている。また、ALTのネイティブの発音を直に聞くことができたことも意欲喚起につながっていた。

実践を通して、生徒間の取り組みに変化を確認することができた。授業を実施した第1学年では、人間関係と学力のバランスを配慮しながらグループ構成をしている。しかし、一部のグループに、学力のバランスで配慮を要するところがあった。そのグループの学習の様子を観察していると、英語で読むことが困難な生徒に対して、みんなで読むところで英語に挑戦するよう働きかけたり、パワーポイントで英文を見せ、自信が持てる日本語で発表したりして全員が達成感を持てる工夫を考えていた。また、自分たちで工夫することで、朗読に主体的に取り組む態度が生まれ、自分たちの発表に価値を感じて精一杯伝える姿が見られた。さらに、国語科と英語科の授業で同じ教材を学習対象としたことから、日本語と英語の差異を超えて、言葉を組み合わせることで表現を生み出す楽しさや、他教科や個人の深い学びにもつながることを予感させる場面も見られた。

(2) 授業実践 B

① 単元名 自己流「枕草子」を執筆し、英訳しよう

授業者：小野奈津美教諭（国語科）、大山真典教諭（英語科）

② 対象生徒と実施時期 第2学年68名（3クラス） 2022年5月～6月

③ 授業構想及び留意点

国語科の学習では、「自己流『枕草子』を執筆しよう」という学習課題を「枕草子」の学習の初めに生徒に伝え、教科書本文だけでなく、教科書に載っていない章段を含めた読み取りを計7時間行った。その後、自己流「枕草子」の執筆に関わる授業を展開した。英語科の学習では、「『枕草子』を英訳する授業」の前に、単語や構文の確認をし、生徒が混乱することなく活動に取り組めるよう工夫した。国語科の授業と英語科の授業は時間を空けず行い、学習にスムーズに取り組めるようにした。

今回の活動を行うことにより、生徒には日本語と英語の言葉の違い、感じ方の違いについての気付きを期待した。そのため、活動の前には言葉に着目できるよう語の意味や捉え方について国語科・英語科でそれぞれ確認を行うようにした。

清少納言「枕草子」の単元において、教科書で作者のものの見方や考え方を学習した後、自分が春夏秋冬でよさを感じるものについて表現する活動を行った。清少納言をお手本として、自分のものの見方や考え方と比較しながら自己の作品を完成させていた。本実践では、古文に親しみを持ってほしいという願いから、気持ちやそのものに対して評価を表す語は古語を用いるよう指示をした。その指示によって、生徒は現代語と古語が混ざった文章を書くことになった。

また、生徒の意欲を引き出すため、自己流「枕草子」を執筆する前に書いたものを英訳することを伝えた。伝えることで、「英訳は大変だから簡易的な文にしよう」と考える生徒が出るのが懸念されたので、それぞれの季節で書く分量を指定し、「自分の考えを自由に書く」という随筆の定義を再度確認するようにした。

執筆の際、「春は自然。桜。たんぽぽ。チューリップ。…」と、単語の羅列になることが予想された。そのため、執筆の前にマッピングを活用してそれぞれの季節の風物詩について考えを広げる時間を取った。また、清少納言が1つの物事についてどのように記していたかについても再度確認を行った。その活動を取り入れたことにより、生徒は季節の風物詩の5W1Hに触れながら作品を書くことができていた。5W1Hについて触れながら書くことで、英訳する際に、日本語と英語の文章構造の違いについての気付きが生まれるのではないかと予想された。

英語科の授業においては、生徒が実際に作成したオリジナルの「枕草子」に目を通し、日本語による多様な表現を、まだ活用できる語彙の少ない英語力でどの程度まで再現させるかが課題であると想定した。

まず意識させる必要があるのは、英文構造である。日本語では主語を修飾語で長くしたり、省略して表現したりしている。そのため、英文には必ず主語と動詞が必要であることを確認し、英文構造を意識して英作文をさせるようにした。次に「をかし」や「あはれなり」などの古語をどのように英語で表現するかを考えた。国語科で、古語の示す意味やその表現を使うときの気持ちについて共有し、その気持ちや感情に着目して古語を英語にした。例えば、「をかし」であればbeautifulやamazing、wonderfulなどを取り上げ、自分がどのような気持ちで「をかし」を表現したのかを生徒に考えさせ、英語に訳させる形にした。古語の英語表現に関して、ただ提示させるのではなく、少しでも新しい表現を今後の英作文でも活用できるように考え、ボキャブラリービルドのために「キーワードゲーム」を実施し、表現の定着を図ってから英訳に取り組ませる計画で実施した。

古語の英語表現のリストや英訳のポイントはパワーポイントでモニター画面に常時示したり、黒板に掲示したりして意識付けながら英訳に挑戦した。

国語科と英語科の連携のポイントを以下の5点に整理して臨んだ。

- ・感情や評価を表す古語は、限定しておく。
- ・英訳することを想定して日本語を書くとき、易しい文になることが予想される。そうならないよう、日本語で書く際は「あ

春は○○

Spring is flower. ← 悪くないけど・・・

主語をはっきりさせよう！
In Spring, we have ~ / we can see ~ / we feel~

英語の文には**必ず主語と動詞**がある！

図1 説明用のスライド (英文構造)

をかし beautiful amazing wonderful	あはれなり impressed 感動する moved 感動する fascinated 魅了される
よし great, perfect very good, the best, excellent	よろし good nice not bad
わろし not good, not nice	あし bad
つきづまし suitable	言うべきにあらざ Not to mention,~

図2 説明用のスライド (古語の英語表現)

<Point>

- ・主語と動詞をはっきりさせること
- ・古語 (をかし、わろしなど) の訳では、その時どんな気持ちなのかを考えてみよう！
It is excellent. など
- ・難しい日本語はできるだけ簡単な表現に言い換えると英文にしやすいよ。

図3 説明用のスライド (留意点)

とで英訳する」ことを意識させないようにする。自由に執筆できるような声掛けや活動内容や進め方を考えて実施する。

- ・英訳の前に、主語と動詞は必ず必要であること等、英文の基本構造を確認する。
- ・英語のテンプレート（春は桜 = In spring, we have cherry blossom.）を複数提示して選択させるようにする。
- ・古語の、英語での多様な訳を確認しておく。

また、単元計画の作成に当たっては、以下の点に配慮した。

- ・単元を通した課題「自己流『枕草子』を書こう」を最初に提示する。
- ・教科書に掲載された章段の読解では、「清少納言のものの見方」を考えたが、単元を通した課題を常に意識させるため、「自分だったら」という視点での記述を毎時間の学習プリントに記入させる。
- ・現代語と古語を用いての「自己流『枕草子』」とするため、古語の意味の確認を毎時間短時間で行う。

④ 単元計画

教科	時数	○ねらい ・学習活動	・指導の留意点
国語	1 2	○自己流「枕草子」を執筆する。 ・マッピングを用いて季節の風物詩についてのイメージを広げる。 ・清少納言のものの見方を参考に、自分の価値観で季節の風物詩をまとめる。	・指示は最初に端的に行い、執筆の時間をじっくりと取れるようにする。
	3	○自己流「枕草子」を鑑賞し合い、単元での学習を振り返る。 ・評価の観点に沿って他の生徒の作品を読み味わい、感想を交換し合う。 ・単元での学びを振り返る。	・評価の観点を明確に示す。
英語	1	○古語の英訳を覚える。 ・キーワードゲームを行いながら古語の英訳を覚える。	・大事なポイントをパワーポイントで示す。 ・1つの古語で複数の英語表現ができることを示す。
	2	○自己流「枕草子」を英訳する。 ・辞書やタブレットを活用しながら英訳する。	・英文構造を意識して英訳させる。 ・長い日本語を端的な表現に言い替えさせて英訳に生かす。
	3	○自己流「枕草子」を英訳する。 ・辞書やタブレットを活用しながら英訳する。 ・活動を振り返る。	・ポイントを黒板に掲示し、意識づけを図る。

⑤ 生徒の学習状況

国語科の授業については、以下のような学習の状況が見られた。

生徒は、自身が感じる季節の風物詩の特徴を捉え、自由な言葉で表現している。生徒の作品B-①とB-②では、評価の古語を適切に用いる様子を見取ることができる。

生徒の作品 B-①

春は花。少しずつ芽生え始める植物の命が開花していく姿はいとよし。また、緑から多色へと変化していく多様な花達は、いとをかし。ただ花より団子の人々は、わろし。

生徒の作品 B-②

秋は虫。夜になると家の近くの田んぼで沢山の虫が鳴いている。虫の声はよろし。だが、沢山の虫の声が大きすぎて、寝られなくなるのがいとあし。ほどよい風で夜がすすしく寝やすいのは、あはれなり。

一方で、感情や評価を表す古語のどれを用いるかについて悩む様子が見られた。今回用いるよう指示をしたのは以下の古語である。

いと (とても)	をかし (趣がある)	あはれなり (しみじみとする)
言ふべきにあらず (言うまでもなく〇〇)	つきづきし (似つかわしい=ふさわしい)	
よし (よい)	よろし (まあよい)	わろし (よくない) あし (わるい)

「あし、わろし、よろし、よし」については、語句の意味についての説明した後に書く活動に取り組んだ。中には、「よくも悪くもないものを表すにはどの古語を使うとよいか」と悩む生徒がいた。今回は、英訳にすること・古語に親しむことを目的に古語を用い、数を絞ったが、そのことで生徒が表現したい内容を限定してしまったという側面も見られた。

自分の訳や表現で活動を終わらせない場面があった。声に出して伝えるなどの相手を意識した活動が見られた。作品完成後の鑑賞会では、生徒たちの「早く自分の作品を読んでほしいと願う」様子、「他の生徒の作品を読みながら笑顔になる」様子が随所に見られた。自身の考えを自由に表現できたという達成感が、このような行動につながったと考えられる。

英語科の授業については、以下のような結果が見られた。

母語で表現した「枕草子」を、語彙数がまだ少ない英語で表現することが生徒たちにとって大きなハードルであった。英文の構造については意識ができていたが、生徒たちが苦戦していた点として、日本語で表現している文の主語が長いために、何を主語にすべきかの選択を悩んでいたことが挙げられる。主語を変えることで、自分が本来表現したい内容を英語で十分に表現しきることの難しさがあった。

生徒の作品 B-③

日本語：あせのかいた体にひんやりとしたそうめんはいとよし。

英文： It was hot and sweaty.

We eat cold somen noodles.

It is very good.

B-③は、主語を「そうめん」から、そうめんを食べる「人」に視点を変えたことで、上手に伝えたい内容を表現することができたと考える。また「紅葉が風でゆらいでいる姿はい

とをかし」という文を「Autumn Leaves are swaying in the wind. How wonderful!」と古語の「をかし」の部分で1年時に既習した感嘆文を活用して自身の感情を表現した作品もあった。これまで学習した表現を上手に活用している状況が見られた。表現する場を設けることで、学習した英文法を活用しようとする意識も高まっていくことを実感した。

⑥生徒の感想

実践に入る前に、生徒の振り返りに「長い日本語を英語ではシンプルにすることが難しかった」等、日本語を短くまとめることへの難しさについての記述があると予想していた。しかし、生徒の振り返りを見ると、前述の記述は確かにあったが、「日本語よりも英語の方が長くなってしまふことがわかった」と、反対の内容を述べる記述も多く見られた。これは、例えば「春は食べ物。」を「In spring, food」、「言ふべきにあらず」を「Not to mention～」とするなど、語数が多くなることへの記述だと考えられる。また、振り返りの中に「日本語は主語と述語がなくても意味が伝わるが、英語は必ず入れないといけないとわかった」とあった。これは、日本語特有の「文脈を読む」こと、「構造の違い」への気付きが生まれていたと考えられる。『「友人と海に入って青春を感じるのはいとをかし」を英語にした時、「をかし」の訳をwonderfulにしたが、水しぶきが飛び散る様子や水の音を表現したいと考えていたので、wonderfulだとなんだかしっくりこなかった。』のように、日本語と英語を比べた際の語感の違いに言及しているものも見られた。

中学生段階で英語の語彙が乏しい生徒だからこそ、伝えたい内容が上手く伝わらないことへの葛藤、また、よりよい言葉を選択しようとする意欲が見られた。活動前は、とても難易度の高い課題であるということを生徒たちは感じていた様子であった。辞書やタブレットを活用し取り組むことで、英語の得意・不得意に関わらず、どの生徒からも取り組むことができたという達成感が感じられた。

(3) 授業実践C

① 単元名 英語絵本の翻訳に挑戦しよう

授業者：大山真典教諭（英語科）、小野奈津美教諭（国語科）

② 対象生徒と実施時期 第2学年68名（3クラス）2022年7月

③ 授業構想及び留意点

現在2学年英語科の課題として、まとまりのある文章を読み、その内容を理解することが挙げられる。文章の概要を理解する課題に対しても、一言一句単語の意味を理解しようとするため、意識することに慣れていない。今回の実践を通して英語の授業で直訳したことを国語の授業を通して日本語を整理してまとめる意識に挑戦した。

国語科の「自己流『枕草子』」の作成（授業実践B）の際、英文の構造について生徒と確認をした。主語と動詞が英文作成に大切であることは生徒に意識付けできていた。本単元はその構造を基にして、誰が（何が）、何をしたのかを明らかにして日本語訳することに取り組んだ。特に絵本の翻訳のため、代名詞のIやitを「私」や「それ」と訳してしまうと誰のことを指しているのかわからなくなってしまう。そのため前後の文脈や挿絵等の視覚情報も活用し、同じ代名詞のIでも、どの登場人物のことを指しているのかを明確にすることを大事にした。

生徒が英語の時間に日本語に直訳したのを見ると、単語の意味は捉えられているもの

の、単語と単語のつながりがわからず上手く助詞を用いることができなかつたり、連文節の働きを捉えられず文の成分が混ざってしまつたり、主語と述語が対応していなかつたりする文が多く見られた。そこで、意識する前に、指導者が「単語の意味は訳されているが、つながりや語順、助詞が誤っている文」を提示し、日本語として分かりやすい文にする活動を取り入れた。その活動をした上で、「分かりやすい文にするために必要なことはどんなことか」という発問を行うと、生徒からは「語順を入れ替える」「主語が繰り返し出てくる場合は代名詞を用いる」「同じような内容は省略する」「日本語での意味をきちんと理解してから省略や入れ替えを行う」等の考えが出された。その内容を踏まえ意識に取り組みせることで、生徒が取り組む活動の焦点化を図った。

授業実践Cは、英語の授業の中で絵本の直訳に重点をおき、5～6人班で『Stone Soup』(John J Muth, SCHOLASTIC 2011)のどの部分を日本語訳するか役割を決めて取り組ませた。英文構造の基本である主語と動詞を明確にし、さらに「いつ・どこで」といった情報を加えていく形で直訳させた。その際に、英文構造を意識しやすくように工夫したワークシートを作成した。特に国語科との連携で意識した点は、英語の授業で直訳したものを、国語の授業を通してより絵本の翻訳らしくすることを目標にしたことである。英語で直訳した本文の意味や内容が損なわれないように日本語を整理してまとめるようにした。必要のない文を省略し、同じ主語が続く部分をまとめる中で、本来の英文が示す意味と異なるように気をつけさせた。直訳した文を推敲することで日本文での表現の幅を深めることにつなげていければと考えた。

本実践では、教科書(「NEW HORIZON English Course 2」)で扱う内容と関連性のある題材を選ぶことを大事にした。Unit 2 Food Travels around the Worldを通して、食べ物や食文化は、世界中を渡り歩き、旅した先の文化や趣向に合わせて変化をしてきたということを学んだ。食文化の歴史や変化について学ぶ題材とSDGsの目標2「飢餓をゼロに」と関連させ、身近な食に関してさらに学びを深める絵本の精選に努めた。その絵本の日本語訳を通して、身近な食に関してどのようなことができるのか、どんなことを大切にすべきかを考えるきっかけにすることを意図した。

以上のことを踏まえ、本実践で選んだ絵本は『Stone Soup』という絵本である。旅する僧侶3人が訪れた村では、戦争や自然災害等で村人の心がすさみ、自分の事しか考えなくなってしまった。他人に無関心な村人たちに、僧たちが「石のスープ」を作ることで、村人たちに他人と触れ合う楽しさや喜びを思い出させ、人と分かち合うことの大切さを気付かせる内容となっている。

この絵本の翻訳に挑戦する前に、上記のように簡単に全体の内容を生徒たちに伝えた。1冊の絵本を分担して翻訳するため、物語全体の概要を伝え、自分が物語全体のどの部分を読んでいるのかを把握し、挿絵等の視覚情報をより活用して日本語訳に活かすことができるように意識させた。

④ 単元計画

教科	時数	○ねらい ・学習活動	・指導上の留意点
英語	1	○食文化の違いや普段の食事について考える。	・食文化の歴史だけでなく給食の残飯等にも触れて、食について関心を持たせる。

		<ul style="list-style-type: none"> 教科書の読解内容を復習し、身近な食に関して考えを共有する。 ○絵本の紹介を聞き、物語の概要を把握する。 ・絵本紹介を聞き、役割分担を決めて直訳を始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本のページを見せながら簡単な英語で概要を紹介する。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ○登場人物を把握し、英文の構造を意識して絵本を直訳する。 ・タブレットや辞書を活用し、主語と動詞に気をつけて直訳する 	<ul style="list-style-type: none"> ・難しい連語や表現を随時取り上げ、全体で意味等を確認する。
	3	<ul style="list-style-type: none"> ○直訳を完成させ、実際に内容が伝わるか読み合わせをする。 ・絵本のページをめくりながら、読み合わせをして物語全体の内容を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・直訳で内容を把握しやすかったどうか、意見交換をさせる。 ・拡大した絵本を各班に与え、実際にページをめくりながら自分が訳したものを紹介することで絵本全体の内容理解を図る。
国語	1	<ul style="list-style-type: none"> ○モデル文から分かりやすい日本語にするための要素を考える。 ・モデル文の意識に挑戦する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の直訳と似たようなモデル文を作成し、意識させることで、意識の際に大切な要素を確認する。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ○絵本の意識を完成させる。 ・意識を完成させ、班ごとに読み合わせをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・読み合わせを通して、直訳したものと意識したものの内容の伝わり方の違いを気付かせる。

※自己流「枕草子」の英語訳挑戦後、2週間ほど間を空けて実施した。2週間の間で教科書本文の内容理解などを行った。その中で、誰が何をしたかに焦点化した。その後、本授業を実施。英語科の授業を3時間（7月4日～8日）、実施後1週間程度間を空けて国語科で2時間（7月22日～26日）の実施。1週間の中で、国語科で生徒の直訳に目を通し、文が成り立っているか、頻度の高い助詞の間違い等を整理し、意識に向けた準備をした。

⑤ 生徒の学習状況

生徒は主語と動詞を意識して英文を読むことができた。絵本の本文で使用されている単語に難しい単語や連語が含まれており、どこまでが動詞なのかを区別することには苦労していた。また、英語から日本語に訳す際に語順を変えることに苦戦する様子も見受けられた。さらに、事前に概要を伝え、登場人物に関しても確認したが、代名詞のtheyやIなどが誰のことを指すのかを理解することに難しさを感じていた。しかし、そのことが、どういう場面なのか、誰が言ったセリフなのかなどを想像しながら英文を訳すことの大切さに気付くきっかけにもなっていた。授業中に、生徒から「イメージしないとわけがわからなくなる。」というつぶやきが多く聞こえた。この実践を通して、まとまりのある文章を読み解く際に、自分の持っている知識も活用しながら、場面状況をイメージすることの大切さを実感することができたのではないかと考える。

生徒の作品 C-①		
英文： They gathered twigs and branches and made a fire.		
誰が (何が) 彼らは (僧侶たち)	いつ・どこで・誰と	何をした 小枝や枝を集めて火をつけ た。

C-①のように、英文の構造を意識し、直訳の段階で語順を整理して訳すことができた生徒も多く見受けられた。

この英文を直訳する際の注意すべき点は、接続詞andが何と何をつないでいるのかである。1つ目のandはtwigs (小枝) と branches (枝) という名詞同士をつなぐ役割を担い、gathered (～を集めた) という動詞の目的語の位置で、何を集めたのかをまとめる働きがある。一方2つ目のandは後ろにmade (～を作った) の動詞が続くため、文の主語であるTheyに対して、gatheredに続く2つ目の動作を示すためのandであり、動詞と動詞をつなぐ役割を担っている。既習語が多く一見簡単そうに見えるが、andがつなぐものを理解できないと意味がわからなくなる英文を、直訳段階で上手にまとめることができている。その要因としてtwigとbranchの意味を辞書で調べ、調べた意味とfireを自身が持つ知識と関連させて「火起こしの場面だ」と状況をイメージできたからではないかと考えられる。既習の英文法既習語彙で構成された英文は理解し易く、意味も捉え易かった様子であった。

生徒の作品 C-②		
英文： After the banquet, they told stories, sang songs and celebrated long night.		
誰が (何が) 彼らは	いつ・どこで・誰と 宴会の後、長い夜の中で	何をした 物語を話し、歌い、祝った。

C-②は、村人たちが徐々に心を開き、スープを皆で作終え、宴会をした後の場面を表す英文である。長時間に渡って語り尽くし、歌って祝ったという内容を直訳で捉えることができている。既習語で多く構成されているが、singの過去形sangに関しては、前後のtoldや歌を表すsongなどの語からsingの過去形だと推測して訳している。内容理解に関する活動を通して、前後の単語や文から意味を推測している。

生徒の活動の様子を観察すると、すぐに書き始める生徒が多かったが、なかなか取り組みない生徒もいた。後者の生徒からは、「文をまとめる必要があることはわかっているけど、どのようにつなげればよいかわからない」と悩む様子が見られた。「もともと短くまとまっている文なので、複数をつなげる必要はないのではないか」と発言する生徒もいた。普段、読点の連続で長文を書く生徒が多い実情のため、このような発言が出ることが意外であった。実際に前者の生徒が書いたものを見てみると、複数の文を1つにまとめたり、必要のない箇所を省略したり、語順を並べ替えたり、言葉を替えたりと、自分たちが理解できるように書き直す様子が見られた。中には、複数の文をまとめるだけでなく、その文と文をつなぐために適切な接続語を補っているものもあった。以下は、生徒2名の訳である。

	直訳	意識
生徒の作品 C-③	僕達は山を登り村に行った。僕達は彼らの家に行った。彼らは誰も挨拶をしなかった。	僕達は山を登り村へ行った。しかし村人は誰も挨拶をせず、僕達が村に入るのを見て、家の窓を閉めた。
生徒の作品 C-④	彼らは小枝と枝を集めて火をつくった。彼らは小さなブリキの鍋を上に乗せた。村の井戸からの水で満たした。勇敢な少女が見守っていた。	彼らは枝を集めて火をおこした。そして小さなブリキの鍋を村の井戸の水で満たした。そこに、見守っていた勇敢な少女がやって来て、(～続く)

C-③は、直訳した際には3つの文で表し、「僕達」「彼ら」など主語が誰なのか不明瞭な文になっていた。意識したのを見ると、この生徒は、自身の頭の中で、主語の明確化、語順の入れ替え、接続語の補充、文のまとめを行ったことがわかる。

C-④は、接続語「そして」「そこに」の補充だけでなく、直訳の「火をつくった」という表現を「火をおこした」という語に替えている。理解しやすい文にするための語を自らの語彙の中から選択し、表現することができている。

意識することになかなか取り組めなかった生徒が、直訳した文に違和感を持たなかった原因としては活字に触れる量の差が考えられる。または、文章の本来の意味や文の構造を捉えられていないのではないかと考えられる。日本文の意味がわかっていないと、前者の生徒が行ったような作業はできない。

生徒の振り返り C-⑤

日本語と英語では、名詞や動詞などの文の構成が異なるので、どこが名詞でどこが動詞なのかを理解し、正確に和訳するのが難しかったです。和訳は5W1Hを使うとできた。

C-⑤は、比較的上手に意識ができていた生徒の振り返りである。この生徒が述べた内容から、英語以前に日本語で文の構造を捉えることができていないと、今回の活動は難しかったと考えられる。

⑥ 生徒の感想

振り返りの中で一番多い内容が、語順を並び替えることの難しさに関する記述であった。全体の43.7%が語順の並び替えに関する振り返りを書いていた。直訳となり単語しか書いていないために、言葉のつながりや自然な日本語を意識してまとめる時に、語順の入れ替えに苦労していた。また、語順を変えたことで前後の文とのつながり、接続の部分がおかしくなると感じていた生徒の様子も見られた。

内容や文、言葉の意味を理解することの必要性に言及している生徒は、全体の17.3%であった。生徒の振り返りや感想から、今回の実践を通して、難しい日本語で訳す英文があり、その日本語の意味を理解していないとその文を省略すべきかの判断が難しかったようだ。また似たような複数の文をまとめる際に、意味が損なわれないように言葉を言い換えることや、どの文章を主軸にして意識するかを迷ったことが読み取れた。また、絵本の内容を理解できているか、場面をイメージしている必要があると感じた生徒も見られた。

省略の難しさについて言及している生徒は、全体の21.7%であった。一方で意味を変えずにまとめる意識が、教科書本文を要約する課題と類似すると感じ、必要のない情報を省略したり、言葉を言い換えたりすることを今後の要約に活用できそうだと考える姿が見ら

れた。また、意識を通して、生徒たちの日本語の文章力を豊かにすることにつながるのではないかと感じた。実際に、夏休み中の国語科からの課題作文に、語順を考え分かりやすい文章を作ることにつなげたいという内容の感想も見られた。

主語と述語に気をつける必要性に言及している生徒も全体の17.3%であった。主語と述語を探し、意味がわかるように考えながら意識していく過程に難しさを感じる記載も見られた。共通していたのは時間をかけて丁寧に直訳していた生徒に多く見られたことだ。直訳段階で文を生成することよりも、じっくり時間をかけて1語1語単語の意味を調べることで精一杯になっていた。そのために、意識段階で誰が主語かを改めて絞ることを意識したのではないかと考えた。しかし一方で、主語と述語が明確になることが意味の伝わる日本語の文になることに気付いていた。そのため、英文の主語と動詞から、日本語の文にする際の主語と述語に注目できたように感じた。

5 考察

本研究では、中学生を対象として、国語科と英語科が同一教材を扱う形で連携する3つの授業実践を行い、そのような学習体験が中学生にどのような効果を与えるのかということについて検討した。

その結果として、授業の中での生徒の反応や授業後の生徒の振り返りからは、第一に、教科間連携による学習への評価が高いことが分かった。学習の振り返りを、「面白い」という言葉を使って行っている生徒が多く見られた。中学1年生にとっては難易度の高い英単語を使って英文を作っている。3つの授業実践は、それぞれ学習課題に難しさがあるものである。その学習課題としての難しさよりも、自分が考えた日本語の文が違う言語になったり、英語で書き表されたものを文脈に沿って自分なりの言葉で表してみたりする体験が、面白さや楽しさとして体感されていると考えることができる。

第二に、国語科と英語科それぞれの学習に対する見方の変化が生じることが明らかになった。国語科と英語科の学習に対する見方の変化は、どちらの教科も好意的な様相を伴っている。授業実践Aの生徒の自己評価が、国語科と英語科ともに非常に高いものであったこと、3つの授業実践を行った授業者が「達成感」という言葉を用いて授業を振り返っていることから、こうした学習が、生徒にとって「学ぶ」ことへの意欲を刺激するものであったことが分かる。このことは、授業実践Bの「自分の訳や表現で活動を終わらせない」という生徒の意識の在り方や、授業実践Cの「語順を考え分かりやすい文章を作ることにつなげたい」のような、今後の自分の表現への活用につなげる振り返りなどにも表れている。

第三に、生徒の言葉に対する意識を高めていることが指摘できる。授業実践Bでは、日本語と英語の文の構造の違いや語感の違いに気付く生徒が見られた。対象となる第2学年の生徒は、小学校と中学校において既に英語を学習している。その生徒が自らの気付きとしてこうした点を振り返ることができているのは、これまでに経験することのなかった、学習内容についての教科を超えた意図的な工夫があったからである。授業実践Aの生徒の振り返りにある「日本語と英語では言語がちがうのに、同じあたかさを感じるようになりました」という感覚の体感も、2つの教科が同じ教材を同時に扱うことで可能になったものであると考えることができる。授業実践Cでは、英語で書かれた文章を、何らかの内

容を表す1つのまとまりとして捉えていることが分かる。授業中の生徒の「イメージしないといけないとわけがわからなくなる」というつぶやきに、その感覚が表れている。英語の文章の意識に取り組む過程で、日頃使っている日本語と比較する思考が自然に働き、英語や日本語についての気付きが喚起されている。学習活動を通して何らかの気付きを得たことが、「面白い」という感覚にもつながっていると考えられる。これらは、学習指導の前提として「何を学習するのかを明確にする」段階を大切に、語順の違い、語彙の違い、表現方法の違いなど、生徒の気付きが生まれるための土台づくりを指導者側が整理していることが、有効に作用している。

生徒たちは、そのまま英語を日本語に、あるいは日本語を英語に直訳できる、ニュアンスが伝わる言葉に訳せるわけではない。これまでは、伝えたいこととその単語や言葉があっているのかどうかをあまり気にすることもなく訳したり、辞書から拾った言葉をそのまま書き連ねたりしていたことが多かったものと思われる。本研究の3つの授業実践は、表現したいと考えていることが自分のことであったり、絵本というわかりやすい媒体の内容であったりしたために、学習課題の難しさに直面しながらも、よりよく伝えたいという生徒たちの願いを引き出したものと考えることができる。

6 まとめにかえて

本研究に係る授業実践は、国語科と英語科の教員それぞれの学習指導に関する気付きを生む結果にもなっている。

授業実践Aを行った国語科の教員は、次のように実践を振り返っている。

本実践では、国語科と英語科が連携して「朝のリレー」を朗読することに挑戦した。全生徒がどこかで自分の力以上のチャレンジができる取り組みとなったと思う。「読む」のではなく伝える相手を意識して「届ける」読み方とはどうすることなのか、詩の世界観を壊さない自作の一文を作るためのテーマや、言葉の響きを考えた表現の工夫、英文を読むために国語のような句読点はどこなのか、英語を上手に音声で読む注意点など、各自の目指す姿に合わせていくつも課題を用意することができ、今日はこれにチャレンジすると達成感を味わいながら取り組むことができたように思う。実践後、国語ではキーワードになる言葉に注目したり、新しい言葉に注目したりする生徒が増えた。また、英語の授業では主語と動詞を意識するようになり、リンキングや相手を意識して話すようになった。また、音読の際の声が大きくなり、教科書以外の絵本も以前より積極的に読むようになっている。今後の課題として2つ挙げたいと思う。1つ目は「語彙量を増やす」ことである。日本語を英語にする際、的確な表現が見つからず、意識や省略、別の表現に変えるという作業が発生した。指導者側でもALTと相談しながらサポートをしたのだが、難しいようになった場面があった。大人も子どもももっといろいろな言葉を知り、適切な言葉を当てはめたり、言い換えたりできるよう、言葉と表現を追究していく必要性を感じた。そしてもう1つは「生徒同士での練り合いの追求」である。1年生ということで、絶対的に語彙量や文法などの知識の少なさはあったものの、何とか表現させたいとサポートが過多になり、生徒らしい良い表現を生かしきれなかったのではないかとこの点に課題を感じた。分からないところから

どう生み出すか、また、生徒同士の良い表現をもっと話し合わせ、友だち同士の感覚を表現に生かすことを、今後も生徒の語彙や表現力を育てていく中で取り組ませていきたい。

授業実践Bと授業実践Cを行った国語科教員は、次のように実践を振り返っている。

今回の単元を通して、生徒の「言葉を選択する」力を磨いていく必要があると感じた。今回は英語にする上で上手く思いを表現できないという生徒のつまずきがあったが、日本語であっても同じことである。普段は、適切ではないとわかっていながらも妥協して既知の言葉を用いて文章を記述していたり、そもそも語彙が少なく同じような言葉を用いて文章を書いたりしているのではないだろうか。自分が日本語で記述した思いが英語で上手く表現できなかったように、失敗経験があるからこそ生徒はより適切な言葉を用いて表現しようとするのだと実感させられた。毎時間の授業で、生徒の記述の細かい表現に着目し、その言葉の捉え方の違いや構造の違い等を生徒自身に振り返らせる時間を確保していきたい。

授業実践Bと授業実践Cを行った英語科教員は、次のように実践を振り返っている。

今回国語科と連携して自己流「枕草子」の英語訳と、絵本の意識に挑戦した。自己流「枕草子」の日本語を英訳したことで、英文の構造をより意識して教科書を読むようになった。また、テーマ作文に取り組む際には、簡単な日本語の表現に言い換えてから英語に訳し、単語の羅列ではなく、主語と動詞がある英文にしているものが以前と比べて増えてきた。今後も自分の考えを英語で表現する課題を設定し、より幅広い文法表現を活用して、表現できるようにしていきたい。また絵本の意識を通して、英語を日本語で分かり易くまとめることに挑戦したことで、日本語の語彙や表現の幅を広げる必要性を感じる子が多かった。英語の学習を深めることで日本語の力に反映されることにつながるのではないかと感じた。分かりやすくまとめる力をつけるには、国語力が試される。これからも教科書本文の内容要約やまとまりのある文章の速読にも挑戦することで意識の力をつけていきたい。その意識を通して、さらに日本語の力を伸ばしていくことに少しでも反映させていければと考える。

国語科と英語科の2つの異なる教科が連携する意義については、これまでも指摘されてきた。2つの教科の連携を授業として具体化することの重要性が、上記の本研究に関わった教員たちの率直な記述に表れている。2つの教科の学習活動を並行して扱うだけで、生徒の気付きを生み出すことができるわけではない。授業実践を行う前に、ねらいとするところを共通理解したり、教材や指導方法を工夫したりする教員間の連携が必要である。そうした具体的な連携が、生徒の新たな気付きや言葉に対する関心の向上を生んでいる。

今後の課題として、第一に、授業間の関係を明らかにして授業実践を展開することである。本研究では、第1学年での授業実践と第2学年での授業実践の関係、第2学年で行った2つの授業実践の相互の関係についての検討が十分には行われていない。学習の目標や授業で扱う教材の特徴について、その共通点や相違点を明確に整理するなど、授業構想の設計を精緻化して実践する必要がある。第二に、中学校における国語科と英語科の連携の効果について、更なる検証を重ねていくことである。本研究で一定の成果が示された「生徒の意識変化」に着目して、実証的なデータを基に検証することを今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 1) 教育課程部会・言語能力の向上に関する特別チーム（2016）「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」, p.10
- 2) 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』, p.5
- 3) 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』, p.135
- 4) 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成29年国語）解説 外国語編』, p.94
- 5) 直山木綿子・大津由紀雄（2015）「小学校教育として外国語教育に求めるもの（対談）」『初等教育資料』8月号, 東洋館出版, pp.36-41
- 6) 柗木貴之（2017）「『国語教育と英語教育の連携』の目的論—言語能力の向上に関する特別チームの議論を端緒に一』, 『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』, pp.333-336
- 7) 柗木貴之（2016）「国語教育と英語教育の連携前史—戦後から1960年代までを対象に一』, 『言語情報科学』巻14, pp.71-87
- 8) 秋田喜代美・藤江康彦・斎藤兆史・藤森千尋・三瓶ゆき・王林鋒・柗木貴之・濱田秀行・越智豊・田宮裕子（2013）「国語科と英語科におけるメタ文法授業のアクションリサーチ」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』巻52, pp.337-366
- 9) 斎藤兆史（2019）「英語教育の現状と課題」, 秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦編『メタ言語能力を育てる文法授業—英語科と国語科の連携』, ひつじ書房, pp.1-8
- 10) 王林鋒（2020）「ことばの教育として国語と連携する小学校外国語教育の実践研究—教科書開発を見据えて—」, 『小学校英語教育学会誌』20巻01号, pp.100-114
- 11) 松本祐子（2020）「言語技術を日本語と英語で学習する試み」, 『宮崎公立大学人文学部紀要』27巻1号, pp.277-296
- 12) 柗木貴之（2019）「日中の英文法教育に関する先行研究」, 秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦編『メタ言語能力を育てる文法授業—英語科と国語科の連携』, ひつじ書房, pp.9-79

Summary

The Effects on Students of the Collaborative Teaching of Japanese Language and English Language: Based on Classroom Practices at a Junior High School

MIURA Toshikazu¹⁾, SHIBUE Manabi²⁾, YAGUCHI Miki³⁾,
ONO Natsumi⁴⁾, OHYAMA Masanori⁵⁾, SATO Shiho⁶⁾

This study examines the effects on students of the collaborative teaching of Japanese language and English language, based on classroom practices at a junior high school. Classes were held for 113 students in the first and second grades of A Junior High School in Y prefecture, in which the Japanese and English language departments taught three units using the same material as the subject matter. An analysis of the development process of the lessons and the students' impressions revealed the following points: First, it was found that the students' evaluation of the inter-curricular learning was high with many students using the word 'interesting' when reflecting on their learning. Secondly, there was a positive change in the students' views on learning in both Japanese and English. Third, it was found that students' awareness of language was increased.

- 1) Graduate School of Teacher Training, Yamagata University
- 2) Educational Research Center of Mogami Regional Organization
- 3) Shinjo Municipal Shinjo Junior High School
- 4) Shinjo Municipal Shinjo Junior High School
- 5) Shinjo Municipal Shinjo Junior High School
- 6) Shinjo Municipal Shinjo Junior High School